

# 神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ (8回連載、第7回)

## 第七章 信仰は個人的な問題か

よく、「信仰は個人的な問題だ」と言われます。イエス様を信じる信仰を持つことは「個人的な問題」でしょうか。これに対する答えは「はい」と「いいえ」の両面があります。キリスト者として生きる信仰には必ず「個人的な信仰」と「公的な信仰」の二つの側面があり、そのどちらか一つが欠けても十分ではありません。この章では「聖霊が正しく働いているキリスト者だけが持つ信仰の二つの側面」について明らかにしたいと思います。

## 信仰の個人的な側面

この問題を明らかにするために二つの話をさせてください。私はよく個人的な話をすると言われますが、それは教会で私の話を聞いている人が眠くならないように興味を持続できれば、と願っているからです。そのためには理屈だけではだめで、私が実際に体験したことをお伝えするのがいいようです。

その昔、ラーヴェンスベルガー地方にフォルケニングという有名な宣教師がいました。彼の宣教によってこの地方は大きく変わりました。ある夜、フォルケニング宣教師は、一人の裕福な農夫に

呼び出されました。彼は広大な畑地を持つ実直で勤勉な農夫でしたが、宣教活動を嫌い、自分が罪人であることを一切認めようとせず、十字架にかかれた救い主など自分と全く関係ない、と思い込んでいる人でした。「私は何も悪いことをしていません。私は誰も恐れない」というのが彼の口癖でした。フォルケニングが呼び出された夜、この農夫は死にかかつていて、一般の習慣通りに聖餐式に預かりたいと願っていました。大柄なフォルケニングは目を輝かせて彼のベッドに近づきました。長い沈黙の後、彼は次のように言つて立ち去ったのです。「私はあなたのことが心配です。このままではあなたは天国には行けず、地獄にまっしぐらですよ」

金持ちの農夫は怒りました。「それが牧師の言うことか。それがキリストの愛なのか!」。ところが夜が更けると、この重態の農夫に、「俺はこのままでは天国に行けない。地獄しかないのだ。それが真実ならどうしよう」という自己の心の声が聞こえてきたのです。自分が犯してきたあらゆる罪が思い出されました。彼は神を敬つていませんでした。時には人を騙しました。こ

のようなことが次々と思い出され、夜通し不安と恐怖の念に苛まれました。心は騒ぐばかりでした。彼の人生には沢山の負い目があり、自分が神の子どもではない、ということがわかりました。彼は真剣に神に立ち返りたいと願いました。

三日が経ち、彼は再び妻に宣教師のフォルケニングを呼びに行かせました。夜中でしたが彼はすぐ来てくれました。この農夫は不安に苛まれて言いました。「フォルケニングさん、私は神様に立ち返らなければならないと思います」と。そこでフォルケニングはこう言いました。「歳をとると人は慌てるようになります。危機に陥ると神に助けを求めます。しかし、そういう時の悔い改めは本物ではありません」。彼はこう語るとさっと帰ってしまいました。この農夫は、再び非常な怒りを覚えました。牧師ならもつと優しく話してくれてもよさそうなものだと思いました。しかしフォルケニングは神の御前にしっかりと立ち、自分の発言が間違っていないことを知っていました。

三日後に農夫は危篤状態になりました。その時、彼はわかっ

神と共に歩む人生

たのです。「私はもうすぐ死ぬ。今までの私の一生のどこに、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制があつただろう」と。彼はそれまでの人生で、自分のために死んでくださった救い主をさげすみ、いつも彼に愛を注いでおられた主を邪魔者扱いしてきたのです。

今や彼は地獄の淵に立ち、絶望の中にありました。彼は再び妻にフォルケニングを呼びに行かせました。訪ねて来たフォルケニングはこの農夫の変化に気づきました。

思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。

(ガラテヤ 6・7)

フォルケニングは病床に近づいて言いました。「このままではあなたは地獄行きです。さあ、一緒にゴルゴタの丘へ行きましょう。イエス様はあなたのためにも死んでくださったのですよ」。そして彼は、イエス様がどのようにして罪人を救い出してくだ

さつたかを、優しい口調で語り始めました。

「まず、『自分が罪人である』ということをはっきりと認めなければなりません。『私は正しい。私は誰も恐れない』と言うのを止め、真理の中に立たなければなりません。そうすればイエス様は、あなたを救うことがおできになるのです」と。すると農夫は、瞬時に次のことを認め、悟りました。「イエス様は、この私のために十字架上で死んでくださった。罪の負い目を赦してください。だから、私は、神様の前で正しいと認められるのだ」と。そしてこの農夫は初めて正しいお祈りをしました。「神様、私のような罪人を憐れんでください。主イエス様、私を地獄の淵から救ってください」。フォルケニングは、主イエス様を呼び求める一人の人間をその場に残して、静かに立ち去りました。彼は、胸をなでおろしたのです。聖書には、イエス様の御名を呼び求める者はだれでもみな救われる、と書いてあるからです。

次の日彼が訪ねてみると、そこには神との平和を得た人がいました。「いかがですか」と彼が尋ねると、この農夫は答え

ました。「イエス様は、恵みによって私を受け入れてくださいました」と。

一つの奇跡が起きたのです。このようにして、一人の傲慢な農夫が、新しい神の子どもに生まれ変わったのです。聖書には、次のような記事があります。イエス様はユダヤ人の指導者ニコデモの質問に答えられました。

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいつて生まれることができますか。」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」

(ヨハネ 3・3～5)

「新しく生まれる」ことこそ、キリスト者の「個人的な側面」

神と共に歩む人生

です。人は狭い門を通じて初めて真に生きるようになり、神の大きな奇跡によって新しく生まれ変わります。それは何も神学的な理論ではなく、あなたが自身が救われることの単純な事実です。どうか、このことをイエス様から直接受け取ってください。あなたが死を目前にした時、フォルケニングのような宣教師は傍にいないかもしれません。しかし、どのような状況にあつても、新しく生まれるためには「自分が失われた者であり、自分の心は悪である」ことを神の前で素直に認めることが、どうしても必要です。新しく生まれるためには、この世で唯一の救い主であるイエス様を「呼び求める」ことが必要です。ですから、新しく生まれるためには、救い主であるイエス様にはっきりと告白しましょう。

私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。

(ルカ 15・18)

それに対して主なる神は次のように約束してください



います。

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1・9)

人が新しく生まれるためには、自分自身をイエス様に明け渡すことを決断しなければなりません。また神は、新しく生まれた人には例外なく聖霊をくださいます。聖書はその人を「額に印を押された者」と表現しています。新しく生まれることなくして神の国に入ることはできません。そして新しく神の子どもとされた人々は、そのことを体験的に知っています。溺れかけた人は、水から引き上げられ、呼吸ができるようになって初めて、自分は救われたのだとわかるのです。

以上が、キリスト者としての「個人的な側面」です。自分が死からのちに移されるためには、このことを個人的に体験しなければなりません。私自身の人生を振り返る時、主イエ

ス様のものとされたことは本当に奇跡だと思います。私は神から遠く離れて罪の中で生きていました。しかし、イエス様の方から私の人生に入ってきてくださいました。そのお蔭で私は主に従うようになり、他の人々が滅びに向かわないように警告し、イエス様のみにと招きたいと願うように生まれ変わったのです。

あなたが新しく生まれ変わると、次のように感謝できるようになります。「救い主である神様の子どもになるとは、何と素晴らしいことだろう。私がイエス様のものとなり、イエス様が私のものとなれる。そのことをこの私が証しできるとは」と。

しかし、新しく生まれ変わることは、信仰のゴールではありません。その人は、やつとキリスト者としての個人的体験のスタートラインに着いたばかりなのです。私が主に立ち返った時、次のように思いました。「助け手である神の声を毎日聞かなければ、私は生きてはいけない」と。このようにして私は聖書を読み始めました。聖書は牧師しか読まない本だと思っている人々がいます。わが家の近くに駐車場があり、そこで私が毎朝歩き

ながら聖書を読んでいるのを近所の人たちは見ていました。てっきり牧師が説教の本でも読んでいるのだと思われていたようですが、まだ牧師にもなつていなかった私は、ただ聖書を読んでいただけでした。聖書は誰にでも読めるのです。

私が牧師になり、若者を対象とした集いを開くようになると、必ず朝食前に皆で十五分間の静かな時を持つようになります。まず賛美の歌を二曲歌い、次いでその日に示された聖書の章を読みます。その後、各自が聖書から一箇所を示され、自分の席に着いてその箇所を熟読します。イエス様を信じ始めた人たちは、いつの間にか自宅でもそうするようになります。

良い羊飼であるイエス様の語られる御声を聖書から直接聞き、イエス様とお話をしないでは、もはや生きて行けなくなるのです。どうかあなたも、新約聖書を読み始めてください。朝か夜に十五分間の静かな時を持ち、主なる神からキリスト者としての元気をいただってください。そして、聖書を読み終えたら、次のように言ってみてください。「主イエス様、あなたとお話をさせてください。今日はすることが沢山あります。ど

うか助けてください。私が陥りやすい罪から守ってください。周りの人々に愛をもつて接することができるよう、聖霊で満たしてください」と。

あなたがこのように祈ると、イエス様は必ず聞いてくださいます。キリスト者は常に主と話すことにより、生きた信仰を継続して実感することができるようです。

最近、信仰を持ったある人に、毎日イエス様と十五分間の静かな時を持つようにと伝えたところ、その人は言いました。「私はあなたのような牧師ではありません。牧師にはそのための時間がありでしょうが、私には他にすることが山ほどあります」。そこで私は尋ねました。「あなたは、そんなに沢山することがあつて、その日のすべての問題をうまく切り抜けるのですか」と。彼は「実は、できないのです」と認めたのです。私は答えました。「それは、神の前に静まる時を持たないからではないでしょうか」。そして、こう話を続けました。「毎朝イエス様に話しかけ、聖書の何章かを読み、それについて祈るということに慣れると、一日が楽に切り抜けることを体験なさる

でしょう。忙しければ忙しいほど、静まるための十五分間が必要となります。そのうちに、それが三十分に延びることになるでしょう。一日の始めに、救い主にあなたの悩みごとをすべてお話すると、不思議に全てがうまく行き始めます。私は自分の体験からそう言うのです。私も同じように、朝から一日中忙しく走り回つてうまく行かなかった時、『そうだ。今日はまだこのことをイエス様にお話ししていなかった。だから主が私に語ることもできなかったのだ。うまく行かなくて当たり前だ』と、突然思い当たることがありました」

イエス様と共に静かな時を過ごすことは、キリスト者の個人的な体験として非常に大切です。やがてあなたは、罪に陥りやすい肉の思いを日々十字架につけるようにイエス様が求めておられる、と気が付くでしょう。

私は、たくさんの人々と話しますが、どうも人間はだれもが不満を持っているようです。妻は夫に、夫は妻に、両親は子どもに、子どもは両親に、何かしら文句を言いたいのです。誰かを指さして、「私が幸せでないのは、あの人のせいだ」と言いたいの

く考えるとあなたの方が正しかった、だから謝る必要はない』と言ってくれました。

この問題について私が先に謝ることには少し勇気がいりましたが、謝るまでは心に平安がありませんでした。このような仲直りと問題の解決も、イエス様の助けの一つです。

イエス様と語る静かな時を持つようになると、日々自分の生の生まれつきの性質、肉の性質を十字架につけることを学ばされます。少しでもそれができると、心がすっきりします。この変化は、イエス様を信じて初めて知ることのできる喜ばしい体験の一つです。信者の中でこのような体験をしたことのない方は、信仰を持つているとは言えないのではないのでしょうか。

私は町を歩いていてふと考えます。町を行き交う人々は、教会に献金をしている点ではほとんどの人がクリスチャンです。もしその中の一人に「あなたはクリスチャンですか?」と聞くと、「もちろん。私は回教徒ではありません」と言うでしょう。さらに続けて「あなたは、自分がキリスト者であるという喜びで眠れなかったことがありますか?」と聞いたとします。するとそ

す。しかし、誰かを指さす時に、気を付けて自分の手を見てください。人指し指は相手の人を向いています。残りの三本の指は、私自身を指しています。十五分の静まる時を持ち始めると、全ての不幸の原因はあなた自身にある、とイエス様が明らかにしてください。あなたの結婚生活がうまく行かないのは、神の御前にいるように生きていないからです。あなたの仕事やうまく行かないのは、神の御前を歩んでいないからです。キリスト者は、毎日、自分の生まれつきの悪い性質を十字架につけることを学ばなければなりません。

ここで私の体験をお話ししましょう。最近、大勢の宣教師仲間といっしょに八日間わたる若者の集いを開きました。この共同生活は非常に祝福され、幸せな時間を共に過ごすことができました。しかし時には、活動方針について意見の相違と対立がありました。そして最終日の聖餐に預かる前に、この問題についてお互いに胸を開いて話し合うことができました。私は意見が対立した三人の仲間の所に行つて謝りました。私が強い口調で主張したことを詫びたのです。三人の仲間は、「よ

う人はきつと、「この人は頭がおかしいのではないか」と思うでしょう。これが現実の姿なのです。現在この世に溢れているのは「キリスト者であることの喜びが伴わないキリスト者」です。ほとんどの人は、教会に献金しなければならぬことに不満を感じ、日々の生活の中で信仰の喜びなど全く感じていません。しかし、あなたが新しく生まれ変わることを体験されると、次のみことばが自分のものになります。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。(ピリピ 4・4)

最近、私は教会に集っている若い人々に、次のすばらしいみことばを伝えました。

しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、羲の太陽が上り、その翼には癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにね回る。(マラキ 4・2)



私は、このことばのように神の前で喜んで子羊のように跳ね回るキリスト者に会ったことは、滅多にありません。なぜでしょうか。たぶん、私たちが本物のキリスト者だとは言えないからではないでしょうか。私は母のことを思い出します。彼女は主の前で、このような大きな喜びを感じていた人でした。母以外にも私は喜んでいるキリスト者たちを知っています。私は年齢を重ねるに従って、主にある喜びをもっともつと体験したいと願うようになりました。そのためには、キリスト者として真剣に歩むことが要求されます。信仰の喜びを深く体験するには、ほんの僅かな信仰があればそれでいいというものではありません。

以上見てきたことが、キリスト者の「個人的な側面」です。冒頭で述べたように、「信仰を持つことは個人的な問題か？」という質問に対し、「信仰は非常に個人的なものだ」というのがその回答です。

それでは、次にもう一つの側面について考えていきましょう。本物の、生きたキリスト者としての信仰には、周りのすべての

人々にわかるような「公的な側面」が存在します。

## 信仰の公的な側面

イエス様を信じるようになると、その人は自然に他の信者の群れに参加するようになります。キリスト者はこの信者同士の交流を「交わり」と言います。この信者同士の「交わり」は非常に大切であり、真のキリスト者であれば、他の人たちと共に主の祝福を受けたいと思つて群れの仲間入りをします。

毎週日曜日には礼拝がありますが、礼拝に出席しない、つまり聖餐には預からない、という人がいます。ラジオ放送を聞いているからとか、最近ではテレビ画面の中継を見て礼拝に参加しているからとか、あるいは聖歌隊の練習で忙しいから、という人もいます。しかし病氣ならともかく、真の信仰者なら礼拝には必ず参加すべきです。

紀元三〇〇年頃、ローマ帝国の皇帝はディオクレティアヌスでした。彼は、かつては奴隷でしたが、解放されて後、ローマ帝国皇

帝の座にまで上りつめました。当時、キリストを信じる信仰はすでにローマ領内に広まっていました。ディオクレティアヌス帝は、前の皇帝がキリスト者を迫害したことを知っていました。彼自身は国民に信仰の自由を認めようと思いました。これは皇帝としては珍しい考えでした。ディオクレティアヌス帝には後継者と目されているガリレウスという若い共同統治者がいましたが、彼は皇帝にこう言いました。「キリスト者を放っておくと、きつと混乱が起きるでしょう。彼らはいつもイエス・キリストを最高の王として崇め、そのことを人前で告げています。反乱になる前に何か手を打つべきではないでしょうか」。ディオクレティアヌス帝は、答えました。「過去の皇帝たちは二五〇年以上もキリスト者を弾圧してきたが、いまだに決着がついていない。だから私は何もするつもりはない。放っておくつもりだ」と。この皇帝は賢明でした。

しかしガリレウスは食い下がりました。「キリスト信者は特別な存在です。彼らには他の人にはない聖霊があると主張していますし、彼らだけが祝福されるとも言っています。非常に

思ひ上がった人々です。早急に何らかの手を打つべきです」と。ディオクレティアヌス帝は、キリスト者の迫害には同意しませんでした。最後には執拗なガリレウスの主張に負けて、キリストを信じる信者の集まりを禁じる通達を出すことにしました。「キリストを信じることは自由、しかし信者が集まることは「一切禁止」と定められました。この法令に違反すると死刑になります。これを知った教会の長老たちは集まって議論した結果、「この新しい法令に従うべきだろう。自分の家で自由に信仰を保つていけば、何の処罰にも会わないのだから」という結論に達しました。

しかし、大多数の信者たちは次のように主張しました。「祈りと賛美を捧げ、説教を聞くために皆が集まることは、キリスト者にとつて無くてはならないものだ。私たちは今までどおり集まろう」と。そして彼らは今までどおり教会に集いました。これを見たガリレウスは、再び皇帝に直訴しました。「ディオクレティアヌス様。キリスト信者たちは、やはり国家の反逆者です。彼らは法令に従おうとしません」と。その結果、キリ

スト者に対する残虐な迫害が起こり、多くの殉教者が出ました。またその一方で、教会に集まることを止めて自分の命を救う道を選んだ信者も多かったのです。そして教会は、集会に來ない信者を脱落者であると宣告しました。

今日のキリスト者の中には、このような脱落者が大勢います。当時の信者が皇帝の通達に反対したのは正しい行為でした。聖書には次のようにあります。

ある人々のように、いつしよに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしうではありませんか。  
(ヘブル 10・25)

ですから祝福されたいと願う方は、真剣にキリスト者でありたいと願う人々の群れの中にぜひ加わってください。信仰の公的な側面を大切にすることもまた、信仰者には大変重要なことなのです。

キリスト者の集いで人々に溶け込み、親しく語り合うには

わりを通して証しされ、表にあらわれます。キリスト者の信仰は、他の信者たちとの交わりを常に必要とします。聖書には次のように書かれています。

私たちは、自分が死からのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。  
(1ヨハネ 3・14)

私は、ビーレフェルトという町で初めて伝道師の助手を務めた頃のすばらしい体験を思い出します。礼拝には少数の人しか集まりませんでした。しかし私たちは、神を信じない自由主義者の人々と、土曜日の夜の食堂で話し合うことができました。夜中に閉店した食堂から外に出ると、百人ぐらいの工場労働者に取り囲まれ、彼らにいろいろと話しかけられ、質問されました。それは今までに無い経験でした。いつの間にか私たちは熱い質問に取り囲まれ、私はそれに答えていきました。イエス様が地上に遣わされたこと、人間は決して幸せでは

神と共に歩む人生

どうすればいいでしょうか。人々との接点を見出すにはいろいろな方法があります。まず、定期的に開かれている信者の集いや若者の集い、家庭で開かれる聖書の集い、また各地で開かれるバイブルキャンプなどに参加してみることです。そこでは皆が心を開いて語りかけてくるし、あなたもいつの間にか、いろいろと語っている自分に気がつくことでしょう。あなたが主にある交わりを求めているなら、主に祈り求めてください。「どこに行けば交わりを持つことができ、イエス様のことをもつと知ることができるのですか」と。大切なことは、「救い主について本当に知ることのできる場所」に行くことです。主イエス様を慕う人々は、この世では少ないかもしれませんが、あらゆる所にいます。

信者同士の交わりがなければ、信仰は死んだものになってしまいます。そしてキリスト者の集まりは、次の四つのが前提です。「第一、賛美すること。第二、聞くこと。第三、祈ること。第四、捧げること」。初代教会のキリスト者は、すでにそのような集会を開いていました。神に人生を捧げた信仰は、それらの交

ないこと、罪のない人は存在しないこと、永遠のいのちがあり、神の裁きがあることなど、私が信じていることを次々に話していったのです。

夜中の二時を過ぎたので、私は言いました。「明朝九時半から礼拝があります。私は準備のため帰らなければなりません。あなたたちが人の目を恐れていないのなら、その礼拝に出席しますよね」。目の前にいた若者が言いました。「私が恐れているって?とんでもない!」。私は彼に尋ねました。「あなたは無神論者でしたね。そのあなたが日曜日に教会に行ったことが皆に知れたら、翌日職場で大騒ぎになりませんか?」。ところが彼は日曜日の朝、賛美歌集を脇に抱えて教会に現れたのです。そして月曜日の夜、私の所に来てこう報告しました。「やはり、あなたは正しかった。私が教会に行ったことで職場の連中は憤慨していました。でも私は、我々がいつも自由、自由と大声で叫んでいるが、その実は哀れな囚われ人だということに気がついたのです。自由思想の本も捨てました。イエス様のことをもつと聞かせてください」。彼は私が担当した若者の中で、初めて神に立



ち返り、回心した人となりました。

そもその発端は、彼が私たちの小さな集いの礼拝に来たことです。彼が集会に来るようになったので、周りの人々も来るようになりました。イエス様への罪が開かれ、主の祝福が溢れ始めました。そして、新しい人々が次々と集会に来て信仰に入る決心をしました。ですからあなたもイエス様のこと、救いのことを知りたければ、まずキリスト者の集いに加わることをお勧めします。

第二の「信仰の公の側面」は、信仰を「口で告白すること」です。ドイツでは、私たちは教会税を払っていればよい、福音の伝道は牧師の仕事だ、と思われているようですが、そうではありません。私はすべてのキリスト者に次のことを知ってもらいたいと思います。福音の伝道は牧師だけに任せておくのではなく、各人が置かれてある職場や学校などで、イエス様のことを宣べ伝えなければなりません。あなたは人の前で次のように信仰の証しをしたことがありますか。「イエス様が今も生きて働いておられるのは事実です。私たちはイエス様のものです」と。私たちが救い主イ

エス様について証しをする勇氣を持たない限り、本物のキリスト者であるとは言えません。

後に来る裁きの日に、キリスト者がイエス様に向かって「私はあなたを信じていました」といくら言っても、イエス様が父なる神に「私はこの人を知りません」と否定される、としたらどうでしょうか。イエス様は「あなたの周りの人々は、自分が地獄に直行していることを知らなかった。しかしあなたはいのちへの道を知っていた。それなのにあなたは人々に警告しなかった。救い主を証しすべき時にもあなたは口を閉じていたではないか」と責められたら、あなたはどうしますか。あなたは「私はまだ信仰が弱かったので、できませんでした」と答えるかもしれません。しかし、主は続けてこう言われるでしょう。「あなたのその弱い信仰を告白すればよかったのだ。たとえあなたの信仰は弱くても、救い主は強い。信仰についての自分の考えを告げるのではなく、ただこのわたしのことを告げ知らせればよかったのだ。わたしはあなたを知らない」と。

わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられる

わたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないという者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。

(マタイ 10・32-33)

これはイエス様が言っておられることです。イエス様は決して嘘は言われません。私たちは一体いつになったらイエス様を証しする勇氣が持てるのでしょうか。

最近、私がルール地方のある町の講演会で話した時のことをお伝えします。この講演会を開いたのは、グスタフという私の友達でした。彼は自動車工場に勤めていて、今はイエス様のことを大いに喜んでいる頼もしい証人の一人です。彼は、ここぞ、という時にイエス様への信仰を臆さずに告白する男です。月曜日の朝、自分の職場の自動車工場に出勤すると、仲間たちは日曜日をどのように過ごしたかで盛り上がっていました。話題の多くは酒を飲んで騒いだとか、女の子と遊んだとかといっ

たことでした。

当時まだ見習い工だった彼は、この連中に「何をしていたか」と聞かれて、午前中は礼拝、午後はブッシュ牧師の青年会に出ていたことを伝えました。すると皆がこぞって彼をからかいました。その時、彼は怒りを覚えて次のように思ったのです。「破廉恥なことは平気で話せるのに、どうして救い主のことは自由に話せないのだろうか」と。そこで彼は、若い同僚たちに次のように話し始めました。「このままだと君たちは地獄に行くしかないよ。だから僕と一緒にブッシュ牧師の青年会に行こうよ。そこではイエス様のことが聞けるのだから」と。

その見習い工グスタフが、後年マイスター（親方）の試験に合格し、工場を去ることになった時には、町に大きな変化が起きていました。大勢の見習い工たちは私たちの青年会に入っていました。YMCAに行っている職人も数人いました。工場の中では、もう誰も卑猥な話をしませんでした。新人が入って猥褻な話をしようとする「グスタフが来るから、黙った方がいいよ」と注意されました。皆は、彼に敬意を払うようになったのです。今や彼は

大きな工場の支配人となつています。神はそうに彼を祝福されたのです。

再び、お尋ねします。果たして私たちキリスト者のうちの何人が、口を開いてイエス様について告白する勇氣を持つているでしょうか。それができるようになると、私たちは靈的にも成長します。

キリスト者の信仰とは、個人だけの問題でしょうか。いいえ、それだけでは十分ではありません。私たちは世界中にイエス様を証しする責任があります。控えめに、惨めに、黙っているのはやめましょう。さもないと、裁きの日にイエス様は「あなたなど知らない」と言われるでしょう。

第二次世界大戦のさなかには、十六、十七歳にすぎない青年会の若者たちが、大勢徴兵されました。私はそのたびに彼らに聖書を贈つて、次のように伝えました。「君たちは、最初の日から厳しい訓練に向かう前に必ず、皆に見えるように聖書を開いて読みなさい。一つの聖句でもいいから口に出して言いなさい。そうすれば、主がどれだけ大きなことを成してくださ

しました。

曹長は、机に向かつて座っており、その机の上には聖書が置いてありました。「用件は何だ」と聞かれて、彼は「曹長殿、お願いします。聖書をお返しください。その聖書は私のものです」と答えました。曹長は聖書を手に取つてページをめくりながら言いました。「ああ、この聖書はお前のものか。これは大変危険な本だということを、お前は知らないのか」。ポイレは答えました。「はい、おつしやるとおりです。聖書は非常に危険な本です。密かに奥にしまい込んでおいてさへも、非常に心が揺さぶられる本です」。曹長は、襟を正してこう言いました。「ここに座れ。俺も一度は神学を学ぼうとしたことがある人間だ」。ポイレは尋ねました。「では、曹長殿は信仰から離れられたのですか」。それからしばらくの間、この四十歳の人物が十七歳の若者と話すことになりました。「俺は心の底ではとても悲しいが、もう後戻りはできない。この歳だと立场上、たくさんものを手放さなくちゃならないから」と。そこで、若者は答えました。「曹長殿はお気の毒ですね。しかし、イエス様に

神と共に歩む人生

るかがわかります。君たちが初日にそれをしなければ、後になればなるほど、難しくなりますよ」と。そして、彼らは私が勧めたとおりのことをしました。初日に聖書を開くと「何を讀んでいるのだ」と聞かれ、「聖書です」と答えたとなん、まるで何かが爆発したかのような騒ぎとなりました。聖書以外なら何でもよかったでしょうに。

彼らの中の二人、ポイレの場合は（残念ながら後に戦死してしまつたのですが）、翌朝自分の所持品を調べてみて、聖書が無くなつてゐる事に気づきました。周りを見渡すと、皆が訝あり顔をしていたので、「誰が僕の聖書を持つて行つたか、知つてるか」と尋ねると、「曹長殿だ」という答えが返ってきました。この曹長は、口やかましく、嚴格で、兵士たちの誰からも恐れられていた人でした。そこでポイレは「これはただでは済まないぞ」と覺悟して、その日の訓練が終わつた後、静かな片隅でこう祈りました。「主イエス様、私は孤独です。まだ十七歳です。私を見捨てないでください。どうかあなたのことを証しし、皆に話せるように助けてください」と。こうして彼は曹長の部屋に行き、ノック

は、どのような犠牲を払つてでも、しっかりと繋がつてゐる価値があるのではないのでしょうか」。曹長は最後に「お前は幸せな奴だ」と言つて聖書を彼に返してくれました。こうして、それ以降は誰も、何も言わなくなりました。

このような勇氣を持つてゐるキリスト者は、どこにゐるのでしょうか。キリスト者の信仰は、個人だけの問題に留まりません。たしかに、新しく生まれ変わり、信仰生活を送ることは各人の心の奥底の問題です。しかし、それだけでは十分ではありません。キリスト者たちは、礼拝、家庭集会、青年会、女性の集いや男性の集いなどの交わり会に出るようになります。キリスト者は、口を開いてイエス様のことを語り、信仰を告白します。それによつてこの世の人々は、主がイエス様を通してキリスト者の心に火をつけたことを知るのです。